
狼少年の新生活

澤群 キョウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狼少年の新生活

【Nコード】

N8962S

【作者名】

澤群 キヨウ

【あらすじ】

「狼少年の初恋（N2115Q）」「狼少年の初恋（N0509R）」完結後のちよつとしたオマケです。この話のみ単品で読んでも、わからない内容になっております（もうしわけありません）

結婚後「父との約束」を守り抜いて、とうとう始まる新生活！ 本編終了後の2人の幸せな1日の様子です。3話完結。大人になった2人なので、R-15でお送りします。

1 / 3 初めての引越し & 1 t ; いつき & g t ; (前書き)

* * 狼少年の初恋 2 人の後日譚です * * これ単品では理解できない内容になっております。

1 / 3 初めての引越し & 1 t ; いつき & g t ;

去年の10月に見かけた、不動産屋の広告。

2月に出来上がる予定の、新月浜駅から徒歩5分の新築の賃貸マンション。

12畳と広めのリビングに、大きなキッチン。2LDKの間取りには、ウォークインクローゼットなんていうんだか便利そうな収納がついていた。

ちようど一緒に暮らす物件を探そうって話していたところで目に付いたこのチラシに、2人で見つめ合って微笑んだ。ここがいいねって。

13階建ての上の方は見晴らしがよくて素敵だった。だけど旦那様の意見はこう。

「3階くらいがいいんじゃないのかな」

3階だと、ベランダから目に入るのは半分以上が住宅地だ。いい景色、ではない。

「そう？ 上の方もいいんじゃない？」

「低い階の方がいいよ。エレベーターが点検中だったりとか、急いでいる時は低い階層の方が絶対便利だし安心だ」

ついでに人間として地面に近いところで生活するのが自然だと思う、なんて付け加えられる。

そう言われると確かにそうかなと思える。あんまり面白くはなかったけどそのごもつともな意見に従うことにした。角部屋の301号室を無事に契約して、2月7日に引っ越すことが決まる。

玲二くんの一家は3月にドイツに行ってしまうので、うちのお父さんが保証人だ。義父との関係は良好らしく、もう2人で会話していてもさほど緊張している様子はない。お父さんもすっかり、よく

できた6人目の息子を気に入っている。

結婚してから3年8ヶ月。ようやく、夫婦2人の生活が始まる。本当に長かった。結婚したっていうのに今までと全然変わらない日々を過ごして、途中不満が爆発して玲二くんを困らせたこともあった。

学業にもしっかり力を入れて、仕事にもものすごく力を入れて、結果的に私と過ごす時間がその分圧縮されていたから。1年半我慢して、こんなの夫婦じゃないってワンワン泣いたら、玲二くんは本当に困った顔をして、ごめんねっていっぱいキスして謝ってきた。

結局全部が早く一緒に暮らす為の努力なんだって、本当は最初からわかってたのに。わざわざ情熱的に私への愛を長々と語ってもらって機嫌を直して、そしてようやくこの日が来た。

努力の甲斐があって、玲二くんは学業でつまづくこともなく、生活のための資金もガツチリ貯めて、ついでに翻訳の仕事もちやんともらえるようになっていて、更には通訳の仕事も依頼してくれるお得意さんを何人も作って……。最初はどこかやっぱり就職を考えていたみたいだけど、それをしなくてもちゃんとやっていけると確信できるくらい、やりたい仕事を在学中に軌道に乗せていた。私は、就職活動に結構苦労した。なんと言っても既婚者っていうのがネックだ。新卒で既婚の女の子を面白がって採用してくれる企業なんてきつと少ない。面接で「子供は？」なんて聞かれてしまうことも多々あって、集団面接の時は恥ずかしかった。だけど小さな出版社になんとか決まって、月浜にあるオフィスに4月から通う。

そんな2人の新居の2LDK。1部屋は旦那様の仕事部屋。もう1部屋は寝室。

新しい家具と一緒に選んだ。食卓はまだ小さくて、向かい合って座る2人用のもの。リビングに置くローテーブルとソファは、ちょっと奮発していいものを。あとはテレビとテレビ台、一応あった方がいいだろうから、棚を1つ。食器は、立花家からいっぱい持ち込むことになった。上品でセンスのいい食器は、お義母さんもしっかり入れが強いらしく、ぜひ使ってほしいと頼まれた。ついでに調理器具ももらう。他の生活家電は全部新しく用意した。洗濯機や冷蔵庫はまだ大きくなっていい。炊飯ジャーも実家のものより随分小さくて可愛いサイズだ。

玲二くんの仕事部屋はちゃんと自分で全部用意しているので、あとは寝室のものだ。クローゼットが広いので、収納は特に用意していない。あと必要なものは、ベッド。

2人で家具屋に出かけて、売り場を見て歩く。店員さんが、「彼は背が高いから大きいものがいいですよ」なんて言ってくる。

彼って、彼氏ってことなのかな。同棲を始める2人がウキウキ家具を買いに来たって思ったのかもしれない。確かにまだ22歳だし、そう思われるのは当然かもしれない。まだ学生で、お金のおいもしなさそうだから、店員さんもあまりセールスに気合が入っていない。

その態度も、ちょっと立派で高いベッドを検討しだした途端に変わった。2人の薬指によく似た銀色のわっかを見つけて、今度は新婚さん扱いでいろいろとおすすめてくる。

「玲二くん、なにか忘れてるものはないかな？」

「きつとあるだろうな。実際に暮らしてみたら、いっぱい出てきそうだな」

なんでも事前にしつかり用意するタイプなのに、そんなことを言っただけで微笑んだ。2人きりの新生活がどんなものになるのかなんて、想像がつかない。さすがの玲二くんも今回ばかりは完璧は無

理なんだな。

「何かあったらまた一緒に選びに来よう」

それに、うん、と返事をして、落ち着いた色のベッドを配送してもらおう頼んだ。

玲二さんと一路君の22歳の誕生日を祝った翌日、朝早くから引越しが始まった。

これを機に、一路君は一足先に故郷に戻って行って、立花家の両親もあと数日であの大きな家を出る。

最初、あの家で暮らすものだと思っていたのに、実は借家だったと聞いてちよつと驚いた。お父さんの恩師から格安で借りていたらしく、さすがにそれを自分が引き継ぐのはちよつと、と玲二くんは遠慮をした。2人だけでやっていくと決めたんだから、2人で探して決めた場所で暮らすうって話してくれた時はすごく、嬉しかった。大体、あの家は2人で暮らすには広すぎる。結婚してからちよこちよ遊びに行ったけど、想像よりもだいぶ広かった。5LDKの、納戸が2つ。狼人間一家の4人と、鳥の一家の3人？ いや、3羽が暮らしても大丈夫な立派な立花家。引き払うけど、定期的に手入れに来る約束になっている。

朝起きて、ご飯と一緒に食べていたら緊張してきた。

こうして家族と並んで食べるのも今日が最後だ。結婚してからもう随分経つのに、勝手な事情ですつと居座り続けた娘で、妹で、姉を、みんなどう思っているかな？

昨日、明日出て行くからって挨拶はちゃんとした。みんな、そうか、くらいで特にあだこうだ言ってはこない。結婚したんだから出て行くのは当たり前で、ようやく行くのかって思ってるのかもしれないけど。

だけど長い間続けてきたこの生活が本当に終わりなんだって思ったら、なんだか涙が出てきた。

この後の引越し作業は、私は自分の持ち物をちよつと運ぶだけで終わる。家具は持っていくものはないから、段ボール箱に詰め込んだ服とかカバンとか、こまごましたものを家の車で持っていくてもらうだけ。

それだけで、園田家の生活がもう終わってしまう。もう園田いつきじゃなくなって3年以上経つのに、この日を待ち望んでいたはずなのにどうしようもなく寂しい気持ちになってしまって、左手にお茶碗を持ったままグスグス、涙をこぼしてしまった。

「いつき、どうしたのよ、泣いたりして」

お母さんがちよつとあきれたような、驚いたような声をあげた。

「うん」

それだけしか答えられない。

「やっと玲二君と一緒に暮らせるんじゃないの。ちゃんと笑顔で出て行きなさい」

「そうだよ、お前が泣いてたら、親父が勘違いして殴りこみに行くぞ」

この後送ってくれる予定の恵兄ちゃんがわははと笑った。

「……それは、困る」

「だろお？ 顔洗ってこいよ」

洗面所で顔を洗って、涙を止めた。自分の顔を見つめる。なんだか、情けない表情。

今日から念願の2人暮らしなのに、確かにこの顔はない。

「ごめん、なんか、とうとう出て行くのかって思ったら急に寂しくなっちゃって」

食卓に戻ってから、そう話した。3人の兄と、1人の弟と、お母さん。みんながうんうんと頷いた。

「わかってたはずなのに、変だよ。でも、みんなでご飯食べるのもこれで最後かなって思っちゃって」

「バカだなあ、どうせ近くに住んでるんだから、いつだって来れるしこれから何度でもここで飯食うんだろ？ あの世界みたいな旦那連れてきてさ」

珍しく、将兄ちゃんが話し出した。普段あんまりペラペラしゃべらない兄は、まだ続ける。

「あいつの家族は海外に行っちゃうんだろ？ だったら正月とかはうちで過ごすに決まってる。全然最後じゃねえよ。泣き出すとか意味がわかんねえ」

そんな憎まれ口を叩きながら、兄ちゃんの声が震えだして、ついでに目の端に涙が光っているのを見つけた。

「なに、将兄、また泣いてんの」

4番目の幸兄ちゃんがプつと噴出した。

「昨日の夜も泣いてたんだぜ、ビール飲んだ後さ！ いつきが出て行っちゃうよって！！」

恵兄ちゃんと六実も、同じような顔でわははと笑った。将兄ちゃんはずかしそうに下を向いて、目をゴシゴシこすっている。

「いつきがいなくなったら、この家のむさくるしさにお前らだって絶対耐えられないはずだ！」

そんなことを考えてくれていたんだ。

だけどこのセリフはおかしくって、お母さんも私も一緒になって笑った。

2 / 3 初めての引越し & 1 t ; 玲二 & g t ;

「忘れ物はないか？」

父さんが、食器を入れたダンボールにガムテープでふたをして、
そう声をかけてきた。

「多分ね」

「まあ、なにかあれば取りに来ればいいか」
それに黙って頷いて、あたりを見回した。

長い間暮らしてきた立花家は、少しガランとしていた。

食器棚がほとんど空になっている。こまごまとしたものは、もう
ドイツに送ってしまったていた。

あとは大きな家具が何点あつて、それらは父の知人たちに譲ら
れることになっている。

階段を上って、自分の部屋に入った。こちらにも、ガランとしてい
る。

ベッドも机も、もう使わない。長い間使ってもうすっかり古くな
っているから、全部粗大ゴミとして来週出される予定だ。

「玲二、僕そろそろ行くよ」

振り返ると一路が微笑んでいた。

「もう行くの？」

「うん。みんな待ってるから」

じいさんをはじめとした、家族。あちらには結婚した後1度挨拶
に行った。ハールに乗せてもらつてあの崖を越えたら、想像よりも
ずっと大量の親戚がいてビックリさせられた。もちろん向こうも、
うわさに聞いていた問題児が人間になつてゐる！ なんて随分驚いて

いたけれど。

しかしなにより驚いたのが、俺の甥と姪の存在だ。

可愛らしい男女の幼子。一路がいつきに思わず抱きついて反省して慌てて逃げ帰ったあの夏の日に生まれていた新しい命。

「夏希」と「美名」の兄妹は、俺を見るなり「ファーター」と声をかけてきた。

驚いて振り返ると、一路はちょっと恥ずかしそうに笑っていた。

「2人はもう、4歳か」

「そう。よくしゃべるよ。2ヶ国語話せるように、僕が教える」

一路が教えたら、なんだか変な感じになりそうだ。

「父さんに教えてもらうようにしろよ」

「僕で平気だよ。だいぶ上手くなったでしょ？」

確かに3年半のフリーター生活で日本語はだいぶ上達していた。ちよつと不思議な敬語や、絶妙な言い回しをすることも多いけれど。

「2人をつれて、遊びに来るから」

「飛行機で来いよ？」

一路はまた、微笑む。きっとあの黒い鳥に乗ってやってくるに違いない。あのチケットもパスポートもない気楽な家用ジェットに乗って、一路はこちらで家族の時間を過ごし、向こうで父親としてもなんとなく育児に参加していたらしい。俺の知らない間に。

「じゃあね、玲二。また来るよ」

窓を開けて、出かける準備をしている。

「今夜はいつきと思う存分」

「それ以上は言わなくていい」

顔を熱くしながら答えると、一路は笑顔で手を振ってきた。

黒い鳥が勢いよく入ってきて、一声かけてくる。

『よう、今夜はとうとう待ちに待ったお楽しみだな！ あんまりやりすぎるなよ！』

「……」

『俺もまた遊びに来るぜ』

ハールは日本がお気に入りらしい。最近ようやく知ったが、ハールはリアの祖父だった。リアはライについてこちらに残るので、孫やひ孫に会いに来る目的もあるのかもしれない。

「待つてるよ」

ハールが本当の姿に戻る。黒い、ゆらめくオーラをまとった大きな鳥だ。

一路がさつと飛び乗ったかと思ったたら姿が消えて見えなくなった。どういいう仕組みになっているかは何回見てもわからない。

階段を下りてリビングへ行くと、ちょうどインターホンが鳴った。引越し業者がやってきたようだ。挨拶をして、よろしく頼むと告げた。食器や衣類のほかには、本が大量にあつて、ダンボールは見た目以上に重い。大きい家具は愛用の棚以外にはないけど、プロに手際よく運んでもらう必要があつた。

「とうとうね、玲二」

母さんが玄関でにつこり笑った。

「一路はもう、行ったよ」

「え？ 私たちには何にも言わなかったけど、もう行っちゃったの？」

黙って頷くと、隣に父さんが来て笑った。

「まあ、すぐに会えるからいいさ。それより玲二、本当によく我慢したもんだ」

その我慢はどの部分をさしているだろう。父の顔を見つめたまま黙っていると、急に表情が渋くなった。

「もしかして我慢しなかったのか？」

「いや、したよ。しました」

「そうよ、してたわよね」

母と兄にはどうしたって隠し事はできない。だから、本当にいつきには触れないまま、いや、キスくらいはしたけれど、とりあえずこどもができるようなことは一切せずにここまでできた。

あの可愛い顔を見続けていたらやっぱりどうしようもなく触れなくなってしまうので、学業と仕事に専念してきた。塾の講師の仕事は妙に上手くいって、俺のおかげで女子生徒の数が倍になったと塾長にこっそりボーナスをもらったりもした。

途中、私のことほったらかしにして、っていつきに泣かれてしまった随分反省して、毎週1日はデートをするようにした。そういうことが今では懐かしい。就職活動を始めたり、一緒に物件を探したり、大学の卒業のために時間を割いたり、この1年半はいろいろとやるが増えて忙しい日々だった。

今日はそれに、大きな区切りがつく。とうとう、2人きりの夜が始まる。

荷物の積み込みは2人にまかせて、新居に向かった。この家には週末に1度帰ってくる。今度は両親の引越し作業を手伝うためだ。父さんは3月末まで仕事があるから、家を片付けながらウィークリーマンションでしばらく暮らすことになっている。母さんは狭いって文句を言ってたけど、ほんの2ヶ月弱の間だけだ。あつという間に過ぎていくだろう。

俺の家族はみんな行ってしまふ。そういう時は人間誰にだって訪れるものだと思うけど、ほんの少し寂しかった。すっかりゆるくなっていた涙腺はだいぶ閉まってきていたけど、新居へ向かう電車に揺られていると目の端にはやっぱり涙が浮かんできて、それをハンカチでそっと押さえた。

駅から歩いて5分の、新築のピカピカのマンション。少し古びた加工をされたレンガが上品に見える外観はなかなか気に入っている。先週から入居が始まっていて、大型の家具は先に配送を頼んでいて既に運びこまれている。あとは2人の生活のための持ち物が揃うのを待っているような状態だ。

中に入って、まだ生活感のない家の中をじっと見つめる。部屋の中の空気は冷たくて、吐いた息が白く広がった。

すぐに業者が到着して、荷物の運び込みが始まった。運び込み先は、仕事用の部屋が寝室か、キッチンかのどれかだ。洋服の箱を寝室に運んでもらうと、部屋の中にドーンと置かれた大きなベッドが目に入って、なんとなく赤面してしまう。今日からここで2人で寝るんですよ！ とアピールしているように思えて他人がそれを目にしていると思うと落ち着かない。

長年愛用してきたシンプルで頑丈なつくりの棚を仕事部屋に入れてもらったなら、もう引越し業者の仕事は終わりだ。代金を支払ってお礼に用意していた飲み物と菓子もお礼に渡して、1人きりになる。早速ゴミ袋を広げて、ダンボールを開けていった。夕方にはスツキリ片付いた状態にしておきたい。

食器の片付けに夢中になっていたら、ドアが開いた。

「玲二くん、お待たせ」

世界で1番可愛い、妻の笑顔がのぞく。ついでにその兄の顔も一緒に見えた。

「玲二君こんにちは」

「恵三さん、こんにちは。ありがとうございます」

「礼なんかいよいよ、水臭い」

そう言いながらリビングの様子をのぞいて、へえ、とつぶやいた。「なんかいい家だなあ。いつき、いいじゃないか、新築っていうのもいいな」

「でしょ？ ラッキーだったんだ。ちようどよく見つかった」

「今度兄弟全員で遊びに来るぞ」

冗談っぽくそんなことを言って笑って、義理の兄は車を敷地内の駐車場の入り口にとめてあるから、と急いで出て行った。それについていって、荷物を降ろすのを手伝う。それほど大量ではない荷物を降ろすと、園田家の大きな車はすぐに出て行った。駐車場から荷物を家の中に運び込むと、とうとう、2人きりだ。

「あのね、お昼ご飯持ってきたの。お弁当作ったんだよ」

なんとなく「2人きりの緊張感」を誤魔化そうとしているような気配を感じる。俺もなんとなく恥ずかしさがあるのでそう思ったのかもしれない。

「ありがとう。ちようどお昼だな」

小さな可愛らしいテーブルに向かい合って座った。家の中はすごく静かだ。それがまた、なんとも緊張を感じさせてくる。

黙ったまま一緒に食べていると、いつきがふふつと笑った。

「なんか緊張しちゃうね」

「そうだな」

俺も、笑った。結婚して何年も経っているというのに、この空気はちよつとヘンだ。

「食器はもう片付いたの？」

「大体は。キッチンはおとちよつとだよ」

だけとまだ、ポットが出ていない。仕方ないのでコンビニで買ったペットボトルのお茶を飲んでいる。

「私はどこからやろうかな？」

「まずは自分の荷物からでいいんじゃないかな」

「そう？ じゃあ、そうしようかな」

園田家から持ち込まれた昼食は使い捨ての弁当箱に入っていた。

それをゴミ袋にポイと捨てて、再び家の片づけを始めた。

「玲二くんって、引越しは初めて？」

「ああ。いつきもそうだよ」

「うん。だからちよっと、ワクワクしてる」

可愛い笑顔が俺のほうを向いている。だけど、きつと朝、寂しかったんじゃないかなと思った。長い間暮らしてきた優しい家族のいる家。これからでもいいくらでも行けるけど、そういうことはまた違う、別離に対する気持ちがあるんじゃないかと思えて、いつきのことを抱き寄せた。

「どうしたの？」

「なんでもないよ」

しばらくぎゅっと抱きしめて、キスをした。いつきはにっこり笑って、俺の1番弱い角度に顔を傾けた。

「さ、先に全部片付けちゃおう」

「そうだな」

お楽しみは、また後だ。途中になっていたキッチンの片づけを再開して、新しい家作りを進めていった。

3 / 3 2人きりの夜 & let's; いつき & g t ;

玲二くんの手際の良さは、それはそれは素晴らしいものだった。

多分、何をどこに置くのか、もう頭の中で完全にイメージができているんだろう。

立花家から譲られたお鍋やポットも、新しく買ったフライパンやカトラリーも、すいすいと迷うことなくしまわれていく。その様子をちよつと眺めて、私も決まった位置を覚えなくては、と考えた。

ウォークインクローゼットなんて便利な空間の中に入って、自分の服やカバンをしまった。季節の合わないアイテムは衣装ケースに入れて、下のほうに綺麗に並べていく。玲二くんがそうしていたから、私もそれに倣ったっていうだけなんだけど。

自分が持ち込んだ荷物の片付けはあつという間に終わったので、他にやることを探した。玲二くんの仕事部屋に関しては触らないほうがよさそうなのでやらないとして、何があるだろう？

キッチンの準備は完了している。ぱつと見、何もない。美しいキッチンだった。これで完了で間違いない。

お風呂場や洗面所をのぞくと、まだタグのついたバスタオルや、開封されていない歯ブラシなんかが置かれていた。これを使えるようにしておこう。

洗面所に並ぶ、2本の歯ブラシになんとなく赤面する。なんか、2人で暮らします感がこの小さな2本の棒に満載になっている。お風呂場には、おそらく玲二くんの愛用のシャンプーが置かれていた。私の分も並べると、こちらもなんだか寄り添って、「ラブラブなんですよ」と言っているような感じがした。

なにもかもが2つずつ。
ベッドの上も、枕が2つ。

さっき片付けていた寝室で何回も見てしまった、あの2つの枕。
考えるだけで顔が熱くなっていく。ずっと望んでいたことだったのに、やっぱりものすごく恥ずかしくて、心がざわざわしてしまつて落ち着かない。

今夜から、生まれて初めて、誰かと並んで眠るんだ。いや、修学旅行とか、生まれたばかりの頃はそんな日もあったわけだけど……とか、なんだか考えが妙にいい訳じみたものになっていく。

玲二くんと一緒になんか、眠れるかな。ドキドキしちゃって、朝まで眠れないかもしれない。

いや、その前に、朝まで寝かせてもらえなかったりとか……。

「いつき」

「ひゃあい！」

突然声をかけられて、おかしな返事をしてしまった。

「どうしたの？」

「え？ ううん、なんでもないよ！ ちょっと寒かったかな！」

「そうか。終わったんだったら、来て。お茶入れたんだ」

寒々しいお風呂場から出てリビングに行くと、テーブルの上から紅茶のいい香りが漂っていた。

カップの横には、可愛い焼き菓子が置かれている。

「これは一息入れる時につて、母さんが用意してくれたやつ」

「おいしそう」

結婚してからしばらく、立花家によく行っていた。玲二くんとは会わずに、お母さんと台所で一緒に過ごしていた。玲二くんの好き

な料理とか、お菓子の作り方を教わって、随分仲良くなった。

妙に迫力のあるお母さんだっけって前から思っていたけど、それが狼女だったからだとは。そんなことを考えながら、楽しく過ごした。ドイツに引っ込んでなかなかに会えなくなるんなら、今のうちに一緒に過ごしておきたい。そう思って、週に1回か2回は必ず行っていた。

だから今日のお菓子も、すっかりお馴染みの味だ。お母さんの800年分の愛情が詰まった、他では絶対味わえない秘密のお菓子。

お茶の時間を終えると、旦那様はまたテキパキと片づけを始めた。私は玄関やトイレに不備がないか確認して、まだあけてないものはちゃんと用意して、最後に2人で仕事場を作り上げていった。

ダンボールをあけて、本を渡すくらいはできる。重たい洋書とか辞書を渡すたびに、手が触れる。そんなことにドキドキしながら、どんどん片付けていく。

最後はつぶしたダンボールの山が出来上がって、それをベランダに運んだ。引越し業者に回収してもらうまではここに置くしかない。はがしたガムテープとか、大量に出たゴミを袋に詰めて、ゴミ捨て場に運んだ。もう、時計は6時を指している。外はすっかり暗くなっていた。

「よし、これで終わり」

ゴミ捨て場から帰ってきて、玲二くんは微笑んだ。

「何か足りないもの、あったかな？」

「そうだな……、特に思いつかないけど……」

お客さん用のスリッパとか、傘立てとかゴミ箱とか、一緒に買いに行った覚えのない細かいものもちゃんと揃っていた。冷蔵庫の中には各種調味料もちゃんと並んでいる。やっぱり用意周到だ。

「ご飯、食べに行こうか」

「そうだね。おなかすいちやった」

コートを着て、2人で外へ出る。鍵をかけて、出かけた。家を出るときから一緒。手をつないで歩く。

全部初めて。やっぱり、まだ慣れなくてドキドキする。

「明日の朝ごはん用の買い物もしないとな」

そうか。なまものだけはまだ、全然なかった。

「うん。じゃあ、寄って帰る」

駅前の可愛い造りのイタリアンレストランで食事をして、帰りにスーパーに寄って帰った。玲二さんのコートのポケットからエコバッグが出てきて、ちよつと笑ってしまった。本当に、感心な人だって。

家に帰ると、玲二さんは台所から何か持ってきた。

「ワイン？」

「今日から新しいスタートだから。記念に乾杯しよう」

ソファに座って、2人で乾杯する。飲む前に、1回、キスをした。

「玲二くん、ワインが好きなの？」

「別にそんなことはないよ。これは父さんがくれたんだ」

ドイツって言ったら、ビールだね、と周囲は言ってくる。玲二くんは日本とドイツのハーフ、というよりも「人間と狼のハーフ」という意識があるので、ドイツがどうこうっていう発想が私の中にはない。

それはおいといて、2人でお酒を飲むなんて初めてのことだった。飲み会なんてものに参加しないし、親友たちと大人になったんだからちよつと飲んでみようか！なんて揃って出かけたことはあるけ

ど、いつも則子が暴れだすし、千早は泣き出すしで大体困った展開になる。友香と手分けして送らないといけないから、誘われて行ってもあんまり飲んだりしない。

酔っ払ったらどうしようかな。

ワインなんて、初めてだ。

そう考えながら、玲二くんに渡されたグラスを受け取った。

「2人の新生活に」

王子様の口からそんなセリフが飛び出してきた。そうか。新生活……。2人だけの、甘い生活。

これからまだ、大学の卒業式が控えている。家族も新居をのぞきに来るし、社会人になる前の残り少ない猶予の時間の間に、友人たちも来るだろう。1カ月半くらい、きつと忙しい。

だけど今夜だけはそんなこと忘れよう。ずっとずっと待っていた、夫婦の暮らしが始まるんだから。

「乾杯」

そう答えて、グラスをカチンと鳴らした。

初めて飲んだワインは少し甘くて美味しかった。玲二くんはご機嫌で何杯も飲んでる。楽しそうに笑顔を浮かべている姿が新鮮で、それを私も幸せな気分で眺めた。

白い頬を赤く染めて、玲二くんが「ふう」と息を吐いた。そして私をじいっと見つめてくる。

なんだかちよつと、目が据わっている。

「酔っちやっただの？」

「どうか……。ちよつと、熱い」

すっかりした口調で、まだじつとこちらを見たまま答えた。こりや酔ってるな、なんて思ってしまう。

「いつき」

「なあに？」

呼びかけておいて、その後はしばらく黙っている。

「どうしたの？」

「……聞きたいことがあるんだけど」

「なあに？ なんでも言って」

また、しばらく黙って、本格的にこいつは酔ってるな、と思ったところでようやく続きが始まった。

「あなさ」

「うん」

「あの……、前回の生理っていつ終わった？」

「……え？」

何を聞かれたのか、正直すぐにはわからなかった。

「あの、生理って……」

「月経って言ったらわかるのかな？」

いや、いきなり言われたらそっちのほうが多分わかりにくい。だけど、やっぱり「整理」じゃなかったってことはよくわかった。

「ごめん、いきなりこんなこと聞いて」

「うん……まあ、ちよつとビックリした」

そんなこと今までに面と向かって聞かれたり確認されたことは、誰からも1度もない。

「結婚してもう結構経つけど、ようやく今日から一緒に暮らすだろ？ しばらくは2人きりがいいから、まだその……子供っていうのはちよつと思つて」

すわった目のまま、私をじつと見つめて、そんなことを言ってきた。

「そつか」

それで妻の体の周期まで知りたいなんて、本当になんていうか、……玲二くんらしい。

「そうだね。私もしばらく、2人きりがいいな」

そう答えて、手を取った。すごく熱い。ちょっと恥ずかしいけど、ちゃんと報告することにしよう。

「昨日終わったばかりなんだよね」

「……そう」

またじつと私を見つめて、酔っ払った感じの王子様はグラスを置いた。

「いつき……あの、俺……」

今度は置いたグラスをじつと見つめたまま、そうつぶやく。

「何？」

「……」

今度は何だろう。黙って、続きを待ってみた。

「初めては、つけたくないんだ」

「うん？」

ようやく始まった続きは、意味がよく理解できない。

「何？」

「今日、初めてするだろ？」

これには、さすがに「何を？」ととぼけることはできない。

並んだ2つの枕が、隣の部屋で待っているのを私も散々意識したんだから。

「そうだね」

返事をするのが恥ずかしい。顔が、熱くなってきた。玲二くんの視線がいつの間にかグラスから私の方にうつついていて、それに気がついてまたちよつと熱さが増す。

「初めてだから、つけたくないんだ」

何を？

「コンドーム」

「……」

とうとう、顔が爆発したかと思った。頭からシューッと湯気が出ている気がする。とにかく、なんと言ったらいいのか、言葉が出てこない。

「いつき、いい？」

「えっと……」

体の周期について考えをめぐらせる。結婚してから改めて、そういう仕組みについて確認したはずだ。えーと、あれが終わってからどのくらいで、卵が……。

「いつき、愛してる」

真っ赤になって考えているところを、押し倒された。グラスを落とさないように必死になっているところに、キスの豪雨が降ってくる。

散々チュッチュと音を立ててからようやく玲二くんが離れたので、ちよつと待って、と告げてグラスを置いた。置いたらすぐに、抱きしめられた。さらにお姫様抱っこをされて、寝室にさらわれてしまう。

大きなベッドの上に、優しく寝かされた。

「あの、先に、お風呂とか……」

全然心の準備ができてない。だけど返事はいつもの夫からは想像できないワイルドなものだった。

「もう我慢できない」

あの、もう5年も前になる、玲二くんに迫った日のことを思い出した。ポケットにゴムを潜ませて、どうしようもなく欲情して押し倒してしまったあの日、あの時間。

あの日仕掛けた愛の爆弾は、時限爆弾だったんだな。きっと思う存分ボカーンと破裂したかったのに、ずっと我慢させられていて、必要な時間が過ぎるのを待っていた律儀な爆弾。

今日、ようやく爆発することができるとだ。

体中にキスの嵐が吹き荒れて、強く抱き合った。

さっきの確認に全然返事はしてないけど、もう、今日はいい。もし赤ちゃんができたら、また我慢してもらおう。仕方ない。だって、そうしたいんだから。私だって玲二さんと1つになりたい。ずっとずっと、そう思っていた。

ずっとお互いに恋してきた少年と少女は、ところどころひっかかりながらも、次の日になったくらい頃、無事に「男と女」になった。

終わった後初めて一緒にお風呂に入って、2人で散々チャイチャ触れ合って、ベッドに戻ってまた愛し合った。激しく、優しく、ゆっくりと溶けて1つになっていく。

長い長い、濃密な夜。きっと一生忘れない、思い出の夜が過ぎていく。

翌朝起きると、綺麗な寝顔がすぐに目に入ってきた。

どうしようもなく愛おしい夫の薄茶色の髪を撫でながら、きっと今世界で1番幸せなのは、私たちだなんて。

そう、思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8962s/>

狼少年の新生活

2011年9月8日03時31分発行